

青少年問題協議会要点記録

日 時 平成27年11月13日（金）

10時から

場 所 市役所3階全員協議会室

議 題

- 1 平成28年度和光市青少年健全育成重点目標（案）について
事務局から説明
- 2 平成27年度青少年健全育成標語の選定について
村山副会長説明
- 3 平成27年度青少年健全育成作文応募結果について
作文審査委員長 大久保委員説明
- 4 会議テーマ「規範意識を育むために学校、家庭、地域は何をすれば
良いか？」について

大久保委員

第1回青少年問題協議会の中で、それぞれ規範・規範意識ということについてご意見が寄せられて、規範・規範意識をどのように捉えていくのか、きちんと理解していく必要があると思う。学校であれば、文部科学省の定義などを基にして、それを具体化していくという取り組みをしていくわけですが、初めに規範意識について文部科学省はどのように定義しているのかについて若干お話したいと思う。文部科学省では規範ということについては、「人間が行動したり、判断したりするときに従うべき価値判断の基準である」と定義している。そして規範意識については、「規範を守ってそれに基づいて判断したり行動しようとする意識である。」としている。学校においては、こういった定義に基づいて規範意識を育むために教師が子どもたちに気付かせていく学習をする。その主な活動が道徳の時間である。道徳教育は、学校教育全体で当然行われていて、道徳の時間だけではないが、気付かせていくという取り組みは道徳の時間で行っている。また学級活動というのがあり、その内容は、毎月子ども達に教えてあげなければならないことをきちんと年間計画に位置づけて指導していく学級指導と、子どもが気付いて考えて作る学級会活動である。つまり、自分達の身近な生活の問題を自分達で解決していくための取り組みを考えていく。それぞれの学級の発達段階にあわせて課題を見出してそのための具体的な取り組みをする。最後にもう一点、規範の大切を実践する活動、気付いて、考えて、作る学習をとおして今度はそ

れを実践する活動がある。この中に集団活動、或いは体験的な活動が位置づけられる。学校で系統性をもって取り組んでいくわけだが、実際に集団活動、体験的な活動をさせていくには学校だけではダメだと思う。そこに家庭、地域の取り組みがあり、こういう取り組みを日常化に結び付けていく、このことが最も重要だが、それをしないと規範意識の定着はできない。しかし、そこに地域や家庭との連携、これがなかなか図れにくいという課題があるのかなというふうに認識をしている。前回の話し合いでも学校で力を育てたものを実践する場として地域や家庭、皆さんの共通理解・認識が働いて活動に結びつけられたら大分変わってくるのかなと思う。

齋藤副会長

ありがとうございました。

私も育てる会連合会、市民会議で大久保委員の発言を形として表していきたいと考えながらやっている。学校で学んだことをどこかで実践して身につける場がなければダメだろうと思う。スマイルシティという事業で一番大事にしていることは子ども達がやりたいことを自分達で企画してやる。親は子ども達がやるより自分達がやったほうが早いから手を出してしまう。学校で学んだことを今度は社会や家庭で体験して自分で身に付けることがまさに大事だと思う。大久保委員が話したことについて、皆さんからご意見をいただきたいと思います。

鈴木委員

最近我々が色々な活動をしている中で親が先にやって手を出してしまうのが多い。子ども達に企画をさせて何かを感じて学んでもらう。学校の縦割りの中ではなくて横のつながりから子ども達同士のつながりが増えて素晴らしい活動になっていくのではないかなと思う。

齋藤副会長

井上委員、和光市内を回っていて感じることはありますか？

井上委員

私は仕事柄、駅に立ってチラシを配ることがよくあるが、バスを待っている高校生や和光国際高校に向かうの子ども達ををみてても、子ども達はしっかり大人を見ていると思う。そこで規範を守らない大人をどのくらい目にして、ただそういう人に対して社会が注意したり、規範を正すという行為を示せるかどうかを含めてきっと子ども達は見ていていると感じる。特に駅前であれば喫煙やマナーが見えてくる場所ですので、自分よりも少し大人の世代、もしくは親と同じ様な世代がどのような振る舞いをしているかを高校生はすごく敏感に感じているんだろうと、10年間位駅に立っているという経験から肌で感じる場所があります。

齋藤副会長

ありがとうございました。子ども達というのは親の姿を本当によく見ていて真似されてしまうので、我々は気をつけなければいけないと感じています。

石川委員、お願いします。

石川委員

前回の会議でも今の子ども達は素直すぎる位にルールを守るという話をしましたが、まさにルールを守る意識、判断が育っていく中で、周りの大人を見てしまう。この部分は非常に大きいと感じる。子ども達が様々な体験をしていく中で接する地域の大人達から学ぶことも沢山あると実感している。中学校2年では職場体験を行います。目的は子ども達の職業意識を育てていくというところが原点ですが、日常生活と全く違う人間関係の中で、仕事をととして子ども達がそれまで学校で教室の中で学んできたことが本当に実際に役立つのか、自分達の判断が間違っていないのかとか、まさに縦の人間関係のなかで学ぶ非常に大きな経験をすることが出来ます。職業体験は僅か2日間なんですけど、帰ってきた子ども達の表情が全然違う。一番の違いは、それまで一人称的なものの見方しか出来なかった子たちが、二人称を飛び越えて、三人称的なものの見方をするようになっていく。当然、三人称的になっていけば規範も強くなっていく。ただそういった視点をしっかり子ども達をもっていくというのは体験という意味では非常におおきなものであり、もっとももっとこういう場が増えていくといいなと思います。地域の県立高校でも行われていて、それぞれの世代で体験活動を更に充実していくと子どもたちのよりよい規範意識が醸成されていくのではないかと感じております。

齋藤副会長

職業体験のお話ありがとうございました。どのような流れで活動をしていますか。

石川委員

各学校の教員が昨年度実地施していただいた事業所に事前アポをとって、そして可能であることを確認したうえで子ども達自身がアポのとり方を学習する。そして子ども達が自ら連絡をし、事前に打ち合わせにいくという流れでやっています。

ただ、実際は事業所を確保するのが非常に困難です。実施する時期が各校同じ時期にどうしてもなってしまう。2年生の1学期の終わり頃が集中する時期、三校あわせると膨大な数になるので、事業所の確保がかなり困難な問題で、今年は市内だけでは確保できずに朝霞市の事業所にもお世話になってようやく確保できたという実態であります。

齋藤副会長

私は商工会の会長を務めています。教育問題は、この会議だけでやろうとしてもなかなか

広がらないと思うので、商工会の方で話をさせていただければ、もっと少し広げられるのではないかと思います。商工会から探すというのは今までと違った展開になるのではないかと思います。

大久保委員

ありがたいお言葉です。三校の校長が併せて商工会に顔を出してお願いにまいります。ありがとうございます。

齋藤副会長

どこまでできるかわかりませんが、今までと違った展開が出来ればいいと思います。会議の中で話して、終わりではだめでここから先に一步進むということ、やらないよりやったほうがいいと思います。

森田委員いかがでしょうか。

森田委員

石川委員から職業体験の話がありましたが、NPO法人わこう子育てネットワーク、もくれんハウスでは職業体験や大学生とか色々な実習を受け入れています。もくれんハウスは赤ちゃんとお母さんが来るところなので、物を売ったりするところではなくて、在宅で子育てをしている人達を子育てを支える場です。私達がスタッフとしてすることはお母さんの話を聞いたり子どもと遊んだり、中学生にしてはわかりにくい仕事だと思う。初日はお母さんの話を聞くのはどうやっていいのかわからないので、隅でこそこそ話していたり、赤ちゃんと一緒にごろごろ寝たり、子ども側の人になっているのがわかる。スタッフが時間をかけてここの場所の意味を再度説明すると子ども達なりに考えて、2日目にはお母さんのそばに行ってみるが恥ずかしがってしまい、質問はできずに赤ちゃんと遊んでいる。自分がここでどういう役割を果たしたらいいか、自分なりに考えていくというプロセスがたった2日間でも少し見える。それが一人称から三人称になるところだと思いますが、もう少し日にちがあればいいと思います。職種によってもそこで受け取るものが違い、いろんな職場があるので、二ヵ所くらい行けばいいなと思います。子ども達が大人に見守られながら安心していっぱい失敗できる場所という様な気がします。そこで怒られることも、自分がまずかったと思うことも、親家族以外の大人と接することができ、職業体験はとても大事だと思います。受け入れ側としても先生方が受け入れや終わったあとに体験後の声をフィードバックしてくれるので、ルーティンになっていかない。教育大綱の中にありますが、地域を変えていく、地域にいる大人たちの気持ちを身近なところから変えていくということには職業体験はいいと思います。規範意識を育むためには、しっかりわかっている大人のところで安心して失敗したりする体験を地域の中で出来るのがいい気がします。

齋藤副会長

ありがとうございました。

木田委員、お願いいたします。

木田委員

社会福祉協議会でも職場体験の受け入れをしています。学校外の実社会における体験活動をとおして考える機会、信頼意識を高め社会人としてのマナーや姿勢を学ぶということを行っていただいています。具体的にはルールを守る、飲食はダメな場所、遊具の貸し出し、利用者との接し方、或いは個人情報の保護というようなことを学んでもらい、職員と一緒に体験していただいている。規範というのは意外と子どもは守ろうとしている。逆に大人が守っていないくて、小学校低学年くらいまでの子どもが「お母さん信号赤だよ」「いいんだよ」といって渡る光景を目にします。規範について学校や家庭で教えていることを子どもは守ろうとしているんだけど、大人社会がどんどん崩して行っているような気がしないでもない。職場体験でも、職場のルールがあるので話せばよくわかって理解して頑張っている。中学生、高校生、大学生それぞれ学校から依頼を受けて受けていますが、大学生になると授業の一環としてで単位が取れる、単位が取れたら終わり、大人になってみるとそういう現実を感じております。

もう一点、ボランティアセンターがございまして、登録していただいたのですが、一般の方ばかりでなく、中学生、高校生、大学生もボランティアの登録をしています。夏休み体験ボランティア、今年も7月24日から28日まで行いました。約束事としては時間を守る、まず入ったら挨拶をしようね、必要以外の私語を慎む、こんなルールを作りながらボランティア活動にご協力をいただいております。また、中学生、高校生を対象にした宿泊ボランティアがありまして、一泊二日で総合児童センターで行っています。子ども達が宿泊して、同時にボランティアとして参加していただき、色んな意味で社会性の訓練や体験をしていただきます。以上、社会福祉協議会として、体験活動、ボランティア活動をとおしてルールの啓発に関わって頑張っていきたいと思っています。

齋藤副会長

ありがとうございました。

今日のテーマ「規範意識を育むために学校、家庭、地域は何をすれば良いか」ということで色んな意見をいただいておりますが、大久保委員、今までの発言でいかがですか。

大久保教育長

各委員のご発言の中に、大人がそうしてしまっているのではないかとありますが、私もそう思います。日本では道德教育が教科化になります。昭和33年に道德が特設されたが、道德が重視されてこなかったという背景があります。そういう中で今の大人たちの規

規範意識がどうなっているのかというのが非常に課題になっている。子ども達の道德教育の中で内面的な価値観を醸成していくわけですが、果たして学んだルールを学校の行き帰りの中で大人の様子を見ていてどうなんだろうと非常に課題意識を持つ。例えば和光市駅前の一方通行路出口の反対側のところの信号があります。あの道路は道が狭く通り抜ける車が殆どいない。駅から来る人はみんな信号が赤信号でも誰も止まりません。そこにたまたま小学生が来て渡ろうとしたので「僕、危ないよ、赤だよ」と声をかけたらその子は止まりました。その声を聞いても大人は止まらない、これが実態です。我々が規範意識を高めしていくことを考え、街の中でそういうことがどうなんだということで意識啓発をしていかないと学校、家庭、地域の連携は難しいのではないかと思います。青少年問題協議会として地域に何を発信していくかということまで考え、机上で話し合ったものが外に出て行かないと啓発に繋がっていかない感じがする。今朝の朝刊を読んでいたら、15歳の女の子の投書「歩きスマホをやめて挨拶をしましょう」が載っていた。15歳の女の子が今の社会現象を見て課題意識を持っている。スマホを見ながら歩いているから自分が挨拶しても返ってこない。その子はきっと先生や親からずっと挨拶について言われてきているので進んで自分は実践している。それを社会の中で実践しようとしてもなかなか通用していかない。こういうことが大きな課題だと皆さんの意見を聞きながら感じました。

齋藤副会長

ありがとうございます。スマイルシティという事業は子ども達が自分達で考えた理想とする街、ルールも子ども達がつくる。子ども達が自分で作ったルールだから守りますが、そのルールを侵してくるのはその親です。子ども達は非常に怒っていました。重点目標の2番目に大人の役割と地域の連携について書いてありますよね。子どもが子どもがというのも大事ですが、子どものままの大人がいっぱいいる。子どもの模範になるような大人になっていかないといけないと実感しております。

今までの話の中で鈴木委員の感じたことがありましたら、お話をお願いします。

鈴木委員

育てる会連合会としてはスマイルシティなど子どもたちに自ら体験してほしいという趣旨で職業体験にも近いイベントを行っている。しかし、齋藤副会長からも話がありましたが、親が出てきてイベントの趣旨が変わってしまい、子どもたちにも伝わっていない。お祭りとイベントは誰が何の為にやるのかがないと趣旨が崩れてしまう。会費が少ないから売り上げの為なのか、子どもの育成活動を必要としてやるのか、やっている趣旨目的が違ってくることが多い。親が子どもについてのことに対して口をだしてくるのは、自分の子どもを守る保護者として当然ですが、みなさんで周りの子どもたちも守るような環境を作らないと自分の子ども自身も守れないことがあるのではないかと感じています。

例えば、スマートフォンも親の使い方も一つだと思います。使わない子どもも親の使い方

を真似て友人同士でもやってしまう。相手に思いがつながるキラキラ言葉で入力するか、単純な言葉を意図も無く並べて簡単に発信するのでは、どちらも子どもはそれを使っていいものだと思ってしまう。親の規範がないことが多いのではと思う。しかし親が忙しい毎日の中で自分以外の子どもを見てあげることができるのという、時間の余裕が無い中では地域活動にもなかなか参加できない。先程の信号を無視をしていたお話ですが、信号待ちをしている時間をもったい無く通過してしまう、それを見て子どももそのくらいはいいと思う。本当に必要な信号かどうかという問題より、信号機を1個つけるのにいくらかかっているのかを私は考えてしまい止まりますが、そのような視点くらいでも信号の必要性を子どもとも考えれば面白いかなと思う。これからもPTA・育てる会連合会の活動で子どもたちが自身でも見極められる力をつける活動を続けて行きたいと思います。

齋藤副会長

ありがとうございました。

大人がもっともっとしっかりしてかなきゃいけないという実感です。ご発言のある方、お願いいたします。

大久保委員

話の中身をどのように地域に家庭に広まっていくのかという取り組みを考えられたらいいと思う。啓発の意味もありますが青少年問題協議会として地域に訴えかけるようなものが出来たらいいなと思っている。例えば、挨拶ひとつにとっても学校では挨拶するというのをどのように子ども達に教えているかというオアシス運動をやっている。「オはおはよう、こんにちは」という意味があって、ただ挨拶すればいいのではなく、オアシスのオはどういう意味があるのか、そういうことをきちんと指導しながら子ども達が学校のなかで楽しく生活できるような指導をしている。でも家や地域に帰ると挨拶が出来ない、挨拶もしてもらえないということが私の耳にも届きます。なぜそうになってしまうのか。石川委員も今の子ども達は素直だといっている。学校ではできても、地域で出来なくなっているということをきちんと探っていかなないとこの課題は解消できないだろうと思う。そのためには意見交換しながら学校という地域にみんなで分かち合えるような環境づくりに繋がる啓発が出来たらいいと思う。色々標語等の応募しながらやっているものと併せて青少年問題協議会としての啓発するような取り組みが出来ればと思っている。

齋藤副会長

ありがとうございました。ご発言のある方いらっしゃいますか。

木田委員

今、挨拶という話がでました。自治会連合会でも今回も学期はじめにやっていてころの

教育でもやっている。日頃の活動の集大成であってイベント的にやるのは疑義がある。毎月第3日曜日は家庭の日というのがある。毎月第3日曜日だけ家庭の日をやればいいんだということではなく、日々家庭というものを意識しながら、その日は特に皆さんで意識しましょうという意味で作ったのだと思います。私も毎朝リヤカーを引いて駅前で挨拶をしています、子ども達はきちんと挨拶してくれます。私に変な格好していても子ども達は差別区別なく、きちんと挨拶してくれる。昔は変なおじさんに声をかけられたら挨拶するとか逃げろとかという教育もあった。確かに悪い人もいるので一概には言えませんが、気持ちで挨拶することを少しどこかで取り上げてやられたほうがいいと思う。挨拶はイベントではなく、みんなが集まって挨拶して子どもが来るのを待っているのを私は挨拶だとは思わない。日頃出てくる「ありがとう」「おはよう」「さようなら」自然と出てくる心の感謝、気持ちだと思っているので、このような考え方を啓発するような考え方を少しでも広めていければありがたい。

大久保教育長

今、学校で各学期始めに行っているのは平成10年から当時の文部省の指定を受けて道徳教育の一環で取り組んできいる取組みで、イベントという意識は学校は持っていない。そこに地域の方の力をお借りしたいということで実施している。地域との連携がなかなかとれていないという課題があり、学校としては取組みの中にコミュニティ協議会に入ってもらったり、地域の方に入ってもらったり、その時期期間だけでも地域の方に学校に来てもらって学校の様子を見てもらう。決してイベントという捉え方は学校はしていない。

木田委員

ちょっと強烈的な話し方をしてしまったが、形式化されてはいけないと思う。

齋藤副会長

先程、家庭の日のお話がありましたが、家庭の日というのは難しい。例えば新春たこあげ大会をやっていますが、凧をあげにくるより作ることが大事だと思っている。家庭の中で親と子どもが一緒になって、自作の凧を作ってもらって、その成果をみんなに見てもらい、凧をあげることを楽しんでもらいたいというのが毎月第3日曜日のきっかけ作りになればいいと思います。今、一人鍋が流行っていますが、鍋は栄養学的にも一人で食べるよりも家族団欒で会話をしながら食べるほうが消化吸収がいいというデータが出ています。ちょっとしたことに気がつく大久保委員が言われた様に広がるんじゃないかと思います。是非皆さんもここだけの話会議で終わるのではなく、せっかく貴重な時間を共有したので今日の会議のことを踏まえて今後に生かしていただければと思います。

他にございますか。

戸部委員

今の話を聞いていて、20年くらい前に当時の総務庁かどこかが出した「大人が変われば子どももかわる」という大きなポスターがあった。それが全然浸透されていないと感じる。重点目標の2番目にもありますが、「大人自身が社会の基本的なモラルやルールについて守り、次世代に伝える」そんな標語を作ってもいいと思う。世の中に浸透しないと意味がなく、突き詰めて考えてみると価値観をどうやって育てるかだと思う。日本は日本の文化に合った価値観があるはずですから、それを今の子ども達にきちんと伝えていかないと将来ダメになってしまう気がする。何か出来ることがあればみんなで協力してやっていければと思いました。

齋藤副会長

重点目標も随分変わってきて、数年前までは家庭という一文字も入れられなかった。何年か前から家庭も大事ということを入るようになった。それまでは学校と地域までしか入れられなかった。今、戸部委員が言われたように青少年問題協議会なので、青少年のことばかりになってしまいますが、大人に対してもやれることがあれば考えていくということが青少年問題協議会の大事なテーマでないかと思います。

今日の会議のテーマ「規範意識を育むために学校、家庭、地域は何をすれば良いか」について、それぞれの皆さんから貴重な意見をいただきました。この意見を言いつばなしにせず、形にすることが大事だと思います。

【出席者】

副市長、井上、待鳥、鳥飼、大久保、上篠、森田、木田、戸部、小池（藤委員代理）、石川、牧、稲垣、鈴木、村山、齋藤、畠山
事務局 スポーツ青少年課（亀井、鈴木、村田）